

石切参道商店街と人々

昭和から現在までの営業の変化

経済学部 4年 橋川 恵

| | |
|------------------------|---------------------------|
| 目次 | 第三章 現代における石切参道商店街 |
| はじめに | 1970～2000年代の住宅地図から |
| 第一章 石切参道商店街の概要 | 第一節 戦後から現在の石切参道商店街 |
| 第二章 戦前～戦後の石切参道商店街 | 第二節 昭和初年から現在を通して見る石切参道商店街 |
| 先行研究の再検討から | |
| 第一節 昭和初年の石切参道商店街 | |
| 第二節 戦時中～昭和30年代の石切参道商店街 | 第四章 戦後の混乱期について 聞き取り調査 |
| | おわりに |

はじめに

石切参道商店街は、近鉄奈良線石切駅の西から石切^{つるぎや}劔箭神社まで約900mに続く坂道(駅からは下り)の両端に広がっている。石切劔箭神社は、「でんぼ(腫れ物)の神様」として知られ、お百度参りをする参詣客が近辺を中心として全国から訪れる。参道の両端に、百数十店の商店が立ち並んでおり、飲食店から食品、占い、漢方薬、衣料品など様々である。

最近はお占いの急増が目立ち、お客に対し親身になって相談する店もある。昨今の核家族化や孤立化で身近に相談する人間が少なくなってしまったことが背景にあり、悩み事や相談事を聞いてもらえる場が求められているのであろう¹⁾。このような点から商店街は客が必要とする形に自然と変化し、互いの関係も密接だと考えられる。

本論文では、まず先行研究をもとに石切参道商店街やその周辺の状況を概観する。その上で石切参道商店街の昭和初年から現在までの業種や客層の変

化をあとづけるとともに各時期の特徴を比較していく。こうした作業を通じて商店街と商店街にかかわる人々（地元住民や参詣客）の相互関係を営業の変化とともに見ていく。

なお、この石切参道商店街については、以下の章で触れるいくつかの関連成果以外にまとまった研究は一つもない。本論文では、そうした点もふまえ、石切参道商店街の歴史について、比較的長期間にわたって論じてみたい。

第一章 石切参道商店街の概要

この章では、石切という地域や石切劔箭神社、そして石切参道商店街の歴史について概観する。

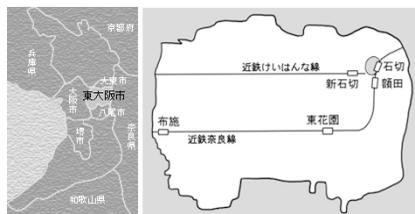
石切と石切劔箭神社

石切は大阪府の中東部にある東大阪市の一地区であり、生駒山地の西麓、辻子谷の扇状地に位置している。江戸時代には、芝、神並、芝神並、植付の各村に分かれていたが、明治22年（1889）に合併し

た時、古代にこの辺りが大戸郷と呼ばれていたのにちなんで大戸村と名付けられた。その後、昭和25年（1950）に、町制を実施する際に、有名であった石切劔箭神社の石切をとって「石切町」と名付けられた²⁾。古くから開けた地で、日下遺跡や延喜式内社の石切劔箭神社がある。斜面に位置しているという地理的条件から、江戸時代中期より水車が発達したといわれている³⁾。昭和30年1月11日には、枚岡町、縄手町、孔舎衛村と合併し、枚岡市の一部（石切町）となった。その後、昭和42年2月1日に枚岡市は布施市、河内市と合併し、現在の東大阪市となる。

今回、論じる石切劔箭神社と石切参道商店街は、現在の町名では東大阪市東石切町に位置している。

図1・2 東大阪市東石切町の位置



備考：図1は東大阪州市役所HP
(<http://www.city.higashiosaka.osaka.jp/>)より。

石切劔箭神社は千年以上の歴史をもち、古代の軍事集団であった物部氏の一族とされる穂積氏の氏神で、石をも切断する鋭い劔や矢を意味する。通称「石切神社」、俗に「石切さん」として親しまれている。劔箭神社というのはいかなる頑丈な岩でも何の苦もなく切れるような立派な劔や箭を祭神の神体すなわち権化として祀るところからきているとされ、単に「石切さん」として親しまれているのは腫物に御利益があるとされて、その「靈験」が世に知られ、一般民衆の信仰と結びついているからである⁴⁾。

大阪電気軌道と近鉄奈良線石切駅

大阪電気軌道は、大手私鉄近畿日本鉄道（近鉄）の直系の前身にあたる。大正から昭和戦前期の関西系私鉄会社である。略称は「大軌」。大正3年（1914）4月30日、上本町 奈良（高天町）間が開通した時に（旧）石切駅（はじめは石切千手寺駅）が開業した。その後、昭和39年（1964）7月23日に奈良線大型化に伴う改良工事の一環として 既存駅より約0.2km奈良寄りにある鷺尾トンネルを開削し、その跡地に駅を移転した。同時に旧生駒トンネル手前であった孔舎衛坂駅と（旧）石切駅を統廃合した。これが現在の石切駅である。

大軌電車の開通によって、まずいちじるしい発展をとげたのは石切神社であった。地元の有力者たちも、石切神社とその付近を開発することに極めて熱心であった。すなわち、大戸村大字芝の山林に石切公園の名を付して、設備をほどこそうとか、あるいは、村の経済力を考えて、これを大軌に無償で寄贈して、公園を造らせようなど種々議論があったという。まだ大軌が開通しない大正2年5月の大戸村村会において、早くもこれを大軌に売り込もうとする決議がなされている⁵⁾。

石切参道商店街

石切参道商店街については、明治36年（1903）の『大阪府誌』に初めて「實者絶えず、社内及び華表前の売茶はみな此れに依りて優に衣食せり」と登場し、鳥居前町発生の様子がかがえる。これは明治26年の片町線（現在は学研都市線）開通により、ようやく参詣客が増加してきたことを示すものである。大正3年（1914）の大軌電車開業当初は、石切駅から神社までは道標一

つなく、道幅が狭い上に狐狸の声さえ聞かれたと伝えられているが、大正4年には日本最古といわれるコンクリートの鳥居が建設され、大阪市内より手軽に短時間で参詣できる利便さも手伝って急激に商店が建ち並んだ⁶⁾。

この鳥居前町が「石切参道商店街」として組織されたのは、戦後の混乱期の有志の集まりからだと言われる。その後、共同事業の推進が求められる状況に対応するため、昭和37年(1962)に石切参道商業連合会として発足した。そして、平成6年(1994)には法人組織、石切参道商店街振興組合を設立する⁷⁾。

第二章 戦前～戦後の石切参道商店街 先行研究の再検討から

石切参道商店街の具体的状況について、分布図とあわせて論じた研究には『生駒山地の人文地理』、『枚岡市史』第二巻別編⁸⁾、『大阪河内の近代 東大阪・松原・富田林の変貌』⁹⁾などがある。これらの論述からは、昭和6、18、28、34、38年の商店街の様子が分かる。これらの文献から読み取れる昭和6～38年の店舗構成の変化については表1としてまとめた。昭和戦前、戦後の順に見ていこう。

第一節 昭和初年の石切参道商店街

まず昭和初年の商店街の状況について記述した『大阪河内の近代 東大阪・松原・富田林の変貌』を取り上げる。ここでの商店街に関する記述は、『大阪朝日新聞』の記事と栗山一夫「大阪及び付近民間信仰調査報告」¹⁰⁾によるものが多い。そこで指摘されているのは以下の点である。

『大阪河内の近代 東大阪・松原・富田林の変貌』 昭和6年

第一に、石切劔箭神社は、明治期にしだいに参詣客を増やしたが、もっぱら大正期以降に飛躍的な繁栄を遂げた。それは大正3年(1914)に、大阪電気軌道(現・近鉄奈良線)の大阪 奈良間が開通し、大都市大阪の市民を大量に生駒の霊山に運ぶようになったからである。明治の頃は徒歩参詣が主で

あったため、小規模にとどまっていた。

第二に、大軌電車開通後の参詣客の急増は、鳥居前町の形成を促し、昭和初期には、石切駅前からの参道に飲食店・土産物店とともに、易姓名鑑定所や漢方薬店が軒を並べるようになった。しかし、独立した店は少なく、多くは二、三業種兼業であった。これは参詣客が明治期よりも増えたとはいえ、付近の観光地と比べるとまだ少なかったからである。

第三に「大阪及び付近民間信仰調査報告」には「100戸中68戸は商家であり（中略）普通人家は僅かに10戸」と書かれ、参

詣客相手の商家が多かった。商店街の様子としては、食堂・うどん・寿

司店などの飲食店に次いで氷店が多い。うどん、すし食堂の多くが氷店を兼ねていることは、夏期においては一般に見受けられた。薬草店が多いのは、石切劔箭神社への参詣客は腫物患者やその関係者であるため、それらの層をねらったからである。薬草はこうした迷信と結合しないと売れなかった。なお、ここで典拠とされている栗山一夫「大阪及び付近民間信仰調査報告」所収の参道図から読み取れる店舗構成を整理したのが表2である。

考察

これらの記述から、昭和初年の石切参道商店街

表1 鳥居前町の店舗構成の変化

| 職業別 | 昭和6年 | 昭和18年 | 昭和28年 | 昭和34年 | 昭和38年 |
|--------|------|-------------|-------|-------------|-------|
| 飲食店 | 29 | 19 (19) | 20 | 18 (17) | 14 |
| 料理兼旅館 | 1 | 6 (5) | 5 | 4 (3) | 1 |
| 和漢方薬店 | 17 | 29 (29) | 9 | 12 (11) | 11 |
| 土産店 | 20 | 36 (36) | 17 | 24 (24) | 11 |
| みくじ・易断 | 3 | 3 (2) | 5 | 9 (9) | 4 |
| 普通商店 | ? | 28 (28) | 47 | 51 (47) | 74 |
| 普通民家 | ? | 8 (8) | 31 | 30 (30) | 24 |
| 理髪店 | ? | 3 (2) | 2 | 0 (2) | 3 |
| 郵便局 | ? | 1 (1) | 1 | 1 (1) | 1 |
| その他 | 30 | 4 (3) | 18 | 9 (16) | 9 |
| 計 | 100 | 137 (133) | 155 | 162 (160) | 152 |

備考：昭和6年は栗山一夫「大阪及び付近民間信仰調査報告」（『民俗学』第四巻 第十一号，昭和7年），昭和18、28、34年は藤岡謙二郎 編『生駒山地の人文地理』，昭和38年は『枚岡市史』第二巻 別編より作成。昭和18年と34年の数値は『生駒山地の人文地理』掲載の図から読み取った。（ ）内は同書の表に掲げてある数値。

表2 鳥居前町の店舗構成（昭和6年）

| 職業別 | 店舗数 |
|------------|-----|
| まじない所 | 1 |
| 易・姓名鑑定 | 2 |
| 神具店 | 1 |
| 土産物店 | 20 |
| 食堂・うどん・寿司店 | 29 |
| 薬草店 | 17 |
| 氷店 | 26 |
| 旅館 | 1 |
| 施術所 | 1 |
| 治療所 | 1 |
| 製薬所 | 1 |
| 計 | 100 |

備考：栗山一夫「大阪及び付近民間信仰調査報告」所収の「石切劔箭神社参道略図」より作成。

は、大軌電車が開通して多少はにぎわい始めたものの、店も参詣客ものちの時期ほど多くはなかった。飲食店(兼氷店)、土産物店に次いで薬草店が多い点から、石切劔箭神社が「でんぼの神様」であるという特色がよく表されている。うどん、すし食堂などの飲食店に氷店を兼ねている所が多かったのは、昭和初年は電気冷蔵庫がまだ普及していなかったためだと考えられる。しかし、この氷店はその後の昭和18年からは、分類項目自体にもあらわれないほど少なくなった。

第二節 戦時中～昭和30年代の石切参道商店街

次に戦時中～昭和30年代について記述したものととしては『生駒山地の人文地理』と『枚岡市史』第二巻別編がある。後者は前者をもとに記述しているが、昭和38年の状況が加えられている。昭和38年の分布図は年代表記に誤りがあるため正確な図であるかどうかは微妙であるが、仮に昭和38年の様子として表3にまとめた。それぞれの記述で指摘されているのは以下の点である。

『生駒山地の人文地理』 昭和18, 28, 34年

第一に、石切は、古き由緒ある石切神社があったというものの、大正期までは辻子谷の水車利用による薬種加工業がやや特殊であるにすぎなかった。それが大正3年の大軌電車の開通で、神社のもつ腫物治癒という現世利益の大衆信仰と結合して鳥居前町として発展し、集落に変化を与えた。そして、鳥居前町の完成期とあわせるように、交通の発達も見られ、「住宅厚生地」に変化しつつある。

第二に、昭和18年は和漢方薬店と土産物店の割合が多かったが、戦後の昭和28年にはこれらは減少し、普通商店と民家が激増している。その理由は、戦後の化学薬品の一般普及と多角的商品販売による利潤増加、宅地不足から空き地を求めた結果であると考えられる。飲食店は、冬には関東煮やうどん屋、夏には氷・アイスキャンディー屋などがあり、飲食店以外では和漢方薬店が多いが目立った。前者は参詣者の大部分が京阪神地区からの日帰り客であること、後者は当地が一般大衆の信仰地であることと参詣者の大部分が

腫物治癒祈願者であることに起因するものだとしている。

第三に、近鉄上本町駅から石切駅までわずか15分（急行）、石切駅から下り坂で神社まで15分、帰途は20分ごとに神社西から発車する近鉄バスという具合に、手軽に参詣できることは参詣客の増加に役立つとともに、鳥居前町の発達に寄与していた。

『枚岡市史』第二巻別編 昭和18, 34, 38年

第一に、近鉄石切駅から石切神社前までかなりの坂道の両側が、和漢方薬店、おみくじ、易断、みやげもの、飲食店で埋められている。食品関係が半数をしめるが、参詣客ばかりでなく衣料店や日用品店などの住民へのサービスも含まれていた。他町にはない漢方薬店が昭和18年から昭和34年の間に減少し、一方で普通民家が大幅に増えた。

第二に、石切駅には近鉄急行が停車し、下り坂の参道を神社へ、帰途は神社西からバスで大阪へというコースは、参詣客にとっては便利であるが、商店側にとっては問題があったとしている。低地帯の自動車交通の発達につれて、参道を片道のみ利用し、往復しない参詣客、自動車交通によるため参道自体をまったく通過しない参詣客が増大することになった。

同書では、こうした観点から漢方薬店や土産物店の減少をとらえ、普通商店や普通民家の増大などに見られる鳥居前町の変化をより合理的に理解できるとしている。

考察

以上の2つの研究に対してコメントしておきたい。

まず、昭和18年に和漢方薬店が多かった理由は、石切は生駒山地の西麓、辻子谷の急斜面に位置しているため、山のわき水と急斜面を利用して水車を動かし、漢方薬を作っていたからだと考えられる。昭和初年に続き、戦後も漢方薬（薬草）は石切ならではの物だったことが分かる。

表3 鳥居前町の店舗構成(昭和38年)

| 職業別 | 店舗数 |
|--------|-----|
| 飲食店 | 14 |
| 料理兼旅館 | 1 |
| 和漢方薬店 | 11 |
| 土産店 | 11 |
| みくじ・易断 | 4 |
| 普通商店 | 74 |
| 普通民家 | 24 |
| 理髪店 | 3 |
| 郵便局 | 1 |
| 薬局 | 4 |
| その他 | 5 |
| 計 | 152 |

備考：『枚岡市史』第二巻別編の「石切鳥居前町商店の分布図」より作成。

先行研究では電車だけでなく、バスなどの交通手段の発達で商店街の発展に大きく貢献していたと述べていた。しかし、プラスの面ばかりではなく、参道をまったく、もしくは片道しか通過しない参詣客が増えたというマイナスの面もあった。そこで商店街は、にぎわいを絶やさないために、自然と客が求める形に変化していったと考えられる。例えば、普通民家の増大にともない、参道には普通商店も増え始めた。これらの研究では、普通商店などの内訳について検討していないが、肉屋・魚屋・八百屋・花屋・衣料店など、地域生活密着型の店ではないだろうか。昭和34年と石切参道商業連合会が発足した後の昭和38年を比べて、一番増加したのは普通商店で、反対に一番減少したのは土産店であった。この時期には、主に参詣客相手であった「鳥居前町」から、地元住民も相手にした「商店街」としての形ができあがってきたのではないだろうか。

第三章 現代における石切参道商店街 1970～2000年代の住宅地図から

この章では、先行研究が論じていない昭和40年以降の石切参道商店街の実態を見ていく。具体的には1979年（昭和54年）から2006年（平成18年）までの『精密住宅地図（東大阪市東部）』¹¹⁾を材料に分析していこう。

第一節 戦後から現在の石切参道商店街

『精密住宅地図（東大阪 東部）』の1979年、1986年、1993年、2000年、2006年に発行されたものをもとに商店街の店舗構成を表に整理した（組合に加盟してない店も含む）。参道商店街の地図である図3を参考に、近鉄奈良線の石切駅から参道を下った場合を想定し、道を挟んで【右】側と【左】側の店に分類している。さらに、参道を駅に近い方から①②③の三つのエリアに区切り、どのエリアにどのような店があるのかも比較する。①②③と区分したのは、これらの境目が神社から来た参詣客がよく引き返してしまうポイントであり、③のポイントで半数ぐらいの人が引き返してしまうからである。その

理由は、神社から来た客は参道の急な坂を上るのがつらい、あるいは、ここに大きく参道を横切る道があるためだと思われる。これは、石切参道商店街で生花店を営んでいる筆者の祖父が参詣客から直接聞いた話である（祖父については第四章で詳しく説明する）。

以上の点をふまえ、表4には【右】側、表5には【左】側の商店街の変化を年代ごとに示した（分量が多いため、末尾に入れた）。また、表6では商店街の変化を数量として表した。以下、表から読み取れる点を述べていく。

まず、1979年のデータからうかがえるのは、(1)石切神社に近いエリア③に店が多く、特に菓子、土産物屋は③に集中していること、(2)漢方薬・薬局は、1979年～2006年の中でこの年が最多であり、その後は徐々に減少していることである。

次に、1986年を見ると、(1)衣料品店が1979年と比べ倍以上に増え、①では新たに6店舗増えていること、(2)全体を見て、【右】の店舗数が1979年と比べて同じなのに対して、【左】では10店舗も増えている。そして、7年後の1993年のデータからは、閉店した店をその隣の店が買い取る・借りる、店舗を広くするといった所が多く見られる。

次に、2000年のデータからうかがえるのは、(1)1993年までは理容所2、美容室2で理髪店が計4店舗あったが、2000年は理容所1、美容室1となり、【右】には店舗が0と

なってしまったこと、
(2)易占いが徐々に増え始めたことである。

そして、2006年を見ると、(1)易占いが2000年に比べ、16店舗から32店舗と倍に増

表6 石切参道商店街の移り変わり

| 業種 | 1979年 | 1986年 | 1993年 | 2000年 | 2006年 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 食料品 | 23 | 25 | 22 | 22 | 25 |
| 飲食 | 19 | 20 | 23 | 23 | 24 |
| 菓子 | 10 | 9 | 7 | 7 | 8 |
| 漢方薬・薬局 | 9 | 7 | 8 | 7 | 4 |
| 易占い | 8 | 10 | 12 | 16 | 32 |
| 衣料品 | 8 | 17 | 21 | 20 | 19 |
| お土産 | 7 | 7 | 6 | 5 | 4 |
| 理髪 | 4 | 4 | 4 | 2 | 2 |
| その他 | 43 | 42 | 37 | 35 | 32 |
| 合計 | 131 | 141 | 140 | 137 | 150 |

備考：『精密住宅地図（東大阪市 東部）』の昭和54年版、昭和61年版、平成5年版、平成12年版、平成18年版を元に作成。

え、地域としては①②に集中して増えていること、(2)2000年に比べ、易占いが増えたせいもあり、【右】では全体で10店舗増えたこと、(3)他の業種には増加傾向が見られないといった点が述べられる。

以上をふまえて、全体から指摘できる点を整理する。

まず、エリア別に見ると、①よりも③の方が全期間を通じて店の密度が高く、③では1979年から2006年まで続いている店の割合が多いが、①では少ない。また、全期間を通じて石切神社に近い③は飲食店が多く、反対に石切駅に近い①では飲食店が少ないという点が指摘できる。③のエリアがにぎわい、経営が長く続いている理由は、神社付近に人が集まりやすいからではないかと考えられる。

次に、左右の違いを見ると、全年を通して左側の店が多いことがわかる。参道は石切駅の東から石切神社の西に続いており、右側は北で左側は南になる。右側は日中になると日差しが強くなるため食料品など生ものの商品は傷みやすく、それ以外でも商品が日焼けしやすくなる。また、日差しが強いと客が商品を見にくくなるといったマイナス点もある。現在では日除けテントを設置する店が増えている。これらの点から、強い日差しを避けて、左側に店が自然と増えていったのではないかと考えられる。

次に、年代ごとの変化を見ると、2000年あたりから増えてきた店は占いや衣料品店、減った店は漢方薬・薬局である。1979年と2006年を比較して、2006年は全体の店の数が増えているのと対照的に、その他に分類される業種の数が減ってきている。絵画教室、書店、不動産、健康センターなど、店数の少ない業種がなくなっていき、新規参入していく店は飲食、食料品、易占いなどに集中しつつある。

第二節 昭和初年から現在を通して見る石切参道商店街

次に、先行研究と住宅地図から分かった昭和初年から現在までの石切参道商店街の様子を通して見てみよう。ここから指摘できるのは以下の点である。

第一に、昭和18年に料理兼旅館は6店であったが、それ以降は昭和38年に1店、さらに年代は開くが1979年（昭和54年）には1店もない状態になっている。このことから戦後は日帰りで参詣する客が増えたのではないかと考えられる。

第二に、周辺の交通機関（電車、バス、タクシーなど）の発達で、良くも悪くも石切参道商店街に大きな影響を与えていた。大正3年に開通した大軌電車は、人の流れを石切に導き、商店街に活気を与えた。しかし、現在に近づくほど車で参詣客が増え、参道を往復せず、買い物をして帰る参詣客が増えたという悪い点もある。

第三に、石切神社は前にも述べたように「でんぼの神様」であるため、参詣客の中には病気やそれに関する悩みをかかえた人が多い。そのため、昭和初年（特に昭和18年ごろ）には和漢方薬店の数がピークであったが、それ以降は減少傾向になり、代わりに現在は易占いが大幅に増えてきている。和漢方薬店が減った理由の1つには化学薬品の一般普及もあるが、「でんぼの神様」を目的とする人に加えて、病気のことではなくさまざまな悩みを解決して欲しいという人が増えたからではないだろうか。また、昭和39年に新生駒トンネルが開通した後、生駒山からのわき水が減少し、それにより水車も回りにくくなり、漢方薬を作る工場も少なくなってきたこともある。

第四に、戦時中～昭和30年代の商店街は、普通民家の増加にともない、地元住民向けの店舗（普通商店など）の増加が目立った。しかし、戦後から現在にかけては、普通商店に仮に含まれるとした食料品店やその他の店舗に大きな増加は見られなかった。同じく参詣客向けの店舗（飲食店や土産店など）にも大きな変化はないと思われたが、易占いが2006年以降に大幅に増えた。石切神社に続く道の両端に広がる「鳥居前町」という性質上、昭和初年から現在に至るまで、参詣客向けの商売（飲食店や占いなど）が多少増減はあったものの、中心であることは変化していないと考えられる。

第四章 戦後の混乱期について 聞き取り調査

石切参道商店街のホームページには「石切参道商店街は戦後の混乱期に有志の集まりからスタート」と書かれていた。この「戦後の混乱期」に商店街の人々は、自分たちにとってより良い環境を作っていくためにどのような活動を行っていたのか。2009年9月現在、石切参道商店街で生花店を営んでいる祖父母に聞き取り調査を行った。

聞き取りを行った祖父母についてプロフィールを確認しておく、祖父・橋川清春は大正12年(1923)生まれ(満86歳)、祖母・橋川スエ子は昭和4年(1929)生まれ(満80歳)である。

石切参道商店街で店(生花店)を営んだ経緯

曾祖父(明治28年(1895)生まれ)は生け花を教える先生であった。その後、生け花の先生を辞め、戦後(昭和22年くらい)に生花店を始めた。祖父は戦争から帰ってきた後、昭和28年、30歳の時に曾祖父(父)の店を継いだ。祖母は昭和28年、24歳の時に石切に来た。

戦前

戦前、石切劔箭神社の参詣客はいたが店はあまりなく、にぎわいはまだ少なかった。飲食店、茶店が少しあり、それ以外には畑で採ってきた物などを持ち寄って道で売るなど、きちんとした店はあまりなかった。「家内安全」「商売繁盛」など、神社への願いを書いた紙を割り箸に貼り付け、参道の両端や空き地の土に立てていた時があった。雨などで流れてしまった際には作り直した。この願いを立てていたのは、店の経営者や参詣客などである。

戦前から参道の裏道に個人が運営するタクシーが通っていた。行きは電車で来て石切駅から参道を下り、帰りは神社付近からタクシーで駅まで帰るといったコースだったが、戦後少ししてタクシーはなくなってしまった。その理由は、少しでもお金を出したくない客が多く、利用者が徐々に減少したからである。

戦後

祖母が石切に来た昭和28年より少し前、曾祖父は商店街の会長をしていた（この時はまだ「石切参道商業連合会」がなかった）。商店街で商売をしている人や近くのお年寄りが集まり、参道にこういう店を増やせば良いのではないかとといったような話し合いが行われた（この時は、参詣客が多いので飲食店を増やそうといった話があった）。このように参道を良くしていこうという話し合いが行われた結果、次々に店が増え、その延長で「石切参道商業連合会」が発足した。当時は特に規約のようなものもなかったが、会費は少なからず出していた。戦後は、苦勞したという気持ちはあまりなく、皆楽しんで店を経営していた。今のように確定申告や消費税といった税金もなかったため、その辺も気にせずのんびりしていた。

曾祖父が会長をしていた時に、参道の上と中間に鳥居が建てられた。参道にアスファルトが敷かれ、雨が降った時に上から砂や石が流れてくるのがなくなった。また、夜の商店街は暗くて危なかったため、照明を付けた。アスファルトは市が資金を出して敷いた。照明は連合会が設置したが、維持費が出せずに困っていた。そこで、会長であった曾祖父がハウス食品の工場に直接出向き、照明に広告（看板）を付ける代わりに維持費を出して欲しいと交渉した。ハウス食品に交渉を行った理由は、当時、神社の近くに関係者があり、何かしら話し合いをしていたからだと思われる。それから10年ほどして、石切参道商業連合会の少しずつ貯めていた会費で維持費をまかなえるようになったので、自然とハウス食品との契約も切れた。広告として付けていた看板は道にはみ出すように付けてあったため、大きい車はぶつかったりし、雨風でボロボロになって自然と外れていった。

商店街の様子は、飲食店がやはりだと他の人もそれを真似て店を始めるといった感じであった。また、飲食店を経営しつつもお客の需要によって土産も一緒に販売する所がいくつかあった。戦後特に多かった店は、飲食店、漢方薬店、占いである。石切劔箭神社は「でんぼの神様」なので、参詣客はよく漢方薬店に立ち寄る。また、病気や悩みを持っている人が訪れるので、

占いにも人が入った。食料品店はそれほどなく、飲食店や土産店などの参詣客向けの店が多かった。店は神社や駅周辺など、一点に固まらず々と存在した。

商店街の環境（道路、建物など）及び客層の変化

曾祖父が経営を始めた昭和22年くらいは、自分の家の前に台を置いたりござを敷いて商品を売る人がいたが、時代を追うごとに家を店として建て替えていくようになった。また、家の前以外にも参道の空いている所にごさなどを敷いて商売をしている人が多かった。

当時、土地は仲介人を通さず、地主に直接借りていた。参道には大地主が何人かおり、その人は自ら店を営んでいなかった。戦後に店が増え始めた時、大阪や全国各地から人が来て、大地主から口約束で土地を貸してもらっていた。この時は、契約書類など何も書いていなかったで、地代の払い忘れはよくあることだった。それから地主の代が変わっていき、土地に税金が付き始めた頃に土地の整理を行った。その際、昔の地代の払い忘れや、どの土地が誰のものかをはっきりさせた。地代の支払いを長い間済ませていなかった人もおり、それが原因でトラブルが起き、参道から出て行ってしまった人もいる。昔は土地を大地主から借りて店や家を建てる人が多かったようだが、現在では自分で土地を購入する人が徐々に増えた。また、地主が希望者に直接貸すという形から、地主が建物と土地を提供し、不動産会社や企画会社を通して希望者に貸すという形が多くなってきた。

昭和39年には近鉄奈良線の新トンネル(現在の新生駒トンネル)が開通し、交通の便が良くなったので参詣客も増えた。今も昔も参詣客が一番多く、参詣客向けの商売(飲食店や土産店、占いなど)が多い。2000年を過ぎた頃から占いの店が激増し、すっかり「占いの街」になってしまった。その理由は、悩みを抱えた人が多く商店街を訪れるようになり、更にテレビなどで占いがはやっているということが紹介され、火が付きだしたからである。これにより、以前に比べて若い女性客が易占い目的で多数参道に来るようになった。若い客が来ることで商店街が活気にあふれると思われるが、大半は常連客と

しては定着せず、あまり買い物をせずに帰る人が多い。昔は80歳以上の参詣客が多かったが、現在は60～70歳の参詣客がよく来られるようになり、平均年齢が若くなった。また、付近に大型スーパーができたせいもあってか、商店街全体の客足が徐々に減少してきており、参道での商売も困難になってきている。

まとめ

戦後間もなくは、店の数も少なくてのんびりとした経営であった。しかし、石切参道商業連合会が発足した前後は、夜に客を増やせるよう照明の設置を行い、その照明の維持費を広告代として会社に支払ってもらうという戦略性のある姿が見え始めた。

戦後の混乱期は、石切参道商店街にとって大きな分岐点だったと考えられる。戦前は主に地元住民が土地を借りて店を経営していたが、戦後は仕事を求めて全国各地から人々が入ってきた。商店街は家族で経営している所が多く、現在では創始者の息子や孫の代まで続いている。戦後の混乱期に入ってきた人々が根付き、現在の商店街の基盤をつくったと考えられる。

おわりに

石切参道商店街は、大正3年に大軌電車が開通してから繁栄し始め、昭和6年に100店ほどだった店舗数も、現在では多少なりとも増減はありながら150店以上に増えた。店舗構成も各時代の客層によって少しずつ変化してきている。商店街の主な利用層を「地元住民」と「参詣客」の2種類として考えると以下のように考察できる。

まず、昭和初年は、大軌電車開通でようやく参道がにぎわい始め、商店街の主な構成は飲食店(兼氷店)、土産物店、薬草店であった。石切神社が「でんぼの神様」であるということに深い関係がある薬草店が多かった点から、主な客層は参詣客であった。

次に、戦時中～昭和30年代は、付近の交通手段の発達により、客足が大幅

に増えた。普通民家の増大にともない、参道には普通商店も増え始め、地元住民でにぎわい始めた時期だったと考えられる。

次に、戦後から現在は、易占いが2000～2006年にかけて激増したこと、絵画教室、健康センターなど地元住民へのサービスがなくなったことが目立った。漢方薬店は化学薬品の一般普及などの理由で減少していったが、新規参入していく店は飲食、食料品、易占いなどに集中するようになっていった。地元住民、参詣客、どちらにも向けた店がまんべんなくある状況だが、易占いが多い点から、参詣客向けに寄った店舗構成ではないだろうか。

聞き取り調査で経営者の立場から商店街を見ると、現在は「地元住民」や「参詣客」という区別にかかわらず、客足自身の減少が目立つようになった。今後は、商店街ならではの住民サービスや独自の土産物などで各方面から客を呼べるように努力しなければならない。

そこで、石切参道商店街では新たな試みとして、2009年10月10日に東大阪初のアンテナショップを開設した¹²⁾。企画に携わったのは、主に商店街の若い人たちで、商店街に活気を取り戻そうと日々努力している。また、アンテナショップの開設と同時に「いしきりん」という新たなマスコットキャラクターも登場した¹³⁾。時勢に合った、親しみのあるキャラクターで子供からお年寄りまで幅広く、客として呼び込もうとしている。石切参道商店街は以前の活気を取り戻せるよう人々とともに日々変化し続けている。

註

1) 「どーなってるの?東大阪」より、「ふるさと東大阪」のページ内にある「石切参道商店街」(2008年1月1日掲載)による。

(http://www.do-natteruno.com/con_c/c21/c21.html) 2009年12月5日確認。

2) 『ふれあい東大阪創刊100号記念特集号』(東大阪コミュニティニュースの会, 2008年), 13ページ。

3) 藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』(大阪教育図書, 1961年), 72ページ。

4) 同上, 93ページ。

5) 枚岡市史編纂委員会編『枚岡市史』第一巻本編(枚岡市役所, 1967年), 830ページ。

- 6) 前註3) 『生駒山地の人文地理』, 94～95ページ。
- 7) 石切参道商店街ホームページ (<http://www.isikiri.com/index.html>)。
- 8) 枚岡市史編纂委員会編 『枚岡市史』 第二巻別編 (枚岡市役所, 1965年)。
- 9) 大谷渡 『大阪河内の近代 東大阪・松原・富田林の変貌』(東方出版, 2002年)。
- 10) 栗山一夫「大阪及び付近民間信仰調査報告」(『民俗学』第四巻第十一号, 昭和7年)。
ここでは『復刻版民俗学』第四巻下[第七号 第十二号](岩崎美術社, 1986年)を見た。
- 11) 『精密住宅地図(東大阪市東部)』(吉田地図株式会社), 昭和54年版, 昭和61年版, 平成5年版, 平成12年版, 平成18年版。
- 12) めっけもんもうけもんまいど! 東大阪 東大阪物産観光まちづくりセンター
(<http://www.maido-higashiosaka.com/>)。
- 13) 現代企画株式会社 ニュースリリース 2009. 11. 25
(<http://www.gendai-net.co.jp/20091125.htm>)。

図3 石切参道商店街

備考：『精密住宅地図（東大阪市 東部）』吉田地図株式会社の昭和54年版を元に作成。

